繪本雪鏡談

七

A13
4436
7

N13
4436
7

繪本雪鏡談卷之七

目錄

○小枝日雪旅館密談の話
小枝佐渡吉鞠代揚くは向るゞ旅館に到國
○多賀家襲封の話
久松三九郎氏備後撫國
○久松三九郎之傳
久松三九郎吉良助吉郎武術を競ふ事
其二

○玉垂宮御法院に於て雲氏弘氏の話

玉垂宮御法院に代参の図

其二

○宝殿院反玉垂の垂氏文書の話

宝殿院反雲の紀ひの上の屋

小枝日向守が祖紋密伝の話

若氏陳邦を閉く福氏来朝に防ぎ家国天下氏泰山の安かを玉ハ所謂社稷良臣の事業なり初め云国実臣なる氏を国よりもとく実なるか秦穆五穀を支氏得く覇業氏中国に名ひ楚昭申包胥に称く既ハ亡弘の宗社氏復氏有徒今来其経綸赫々して青史に輝き国業の若等成乃豆雲ハ氏名ん や却て支賀大紀氏則ち筑摩川に於く賊臣大月義人が毒刃に罹て逝去しぬ

いへども藩中の忠臣渠が陰謀なる事氏敢て知ず専嗣若長門守紀時ハ襲封氏法事方今を勢ひ尤も発臣小枝日向守宗道紀る事臣浦井典侍石尾豆水大月義人の立臣続山氏殺害せしのち

小枝
佐渡
上
国

繪本智鏡炎卷二

多賀部貴戚の名を小枝佐渡守と月代頼ひ御役人松三九郎
村井市義武まつりごとを執奪川の動静と図圏部治部乃武徳ひ人々
義人が一身と興りて事業しるべ只一騎馬の駿打く佐竹氏の孫武
遂其後幼更小島く小枝月匂る結鉢に孔分小枝佐渡守家事を
て未着せ〜せ通じ〜るべ月匂る大内聚る亜に深密一室に招し人
武士大事あり て只一騎怪勿斯よ事うるや敬く名武安んぜん新くべ
速み其未名武図んと乞奇て為るべ佐渡守徽笑是下深く驚く
事みるべ不倫自〜来るものやきびの外に世人事武恐るがゆ名
のく郎人今眉武賛の名事ふあ〜べ其加〜を主君の逝を馬河の城
武犯〜自〜拒れの人の祖るうと人べども凡英邁の主を新長小主

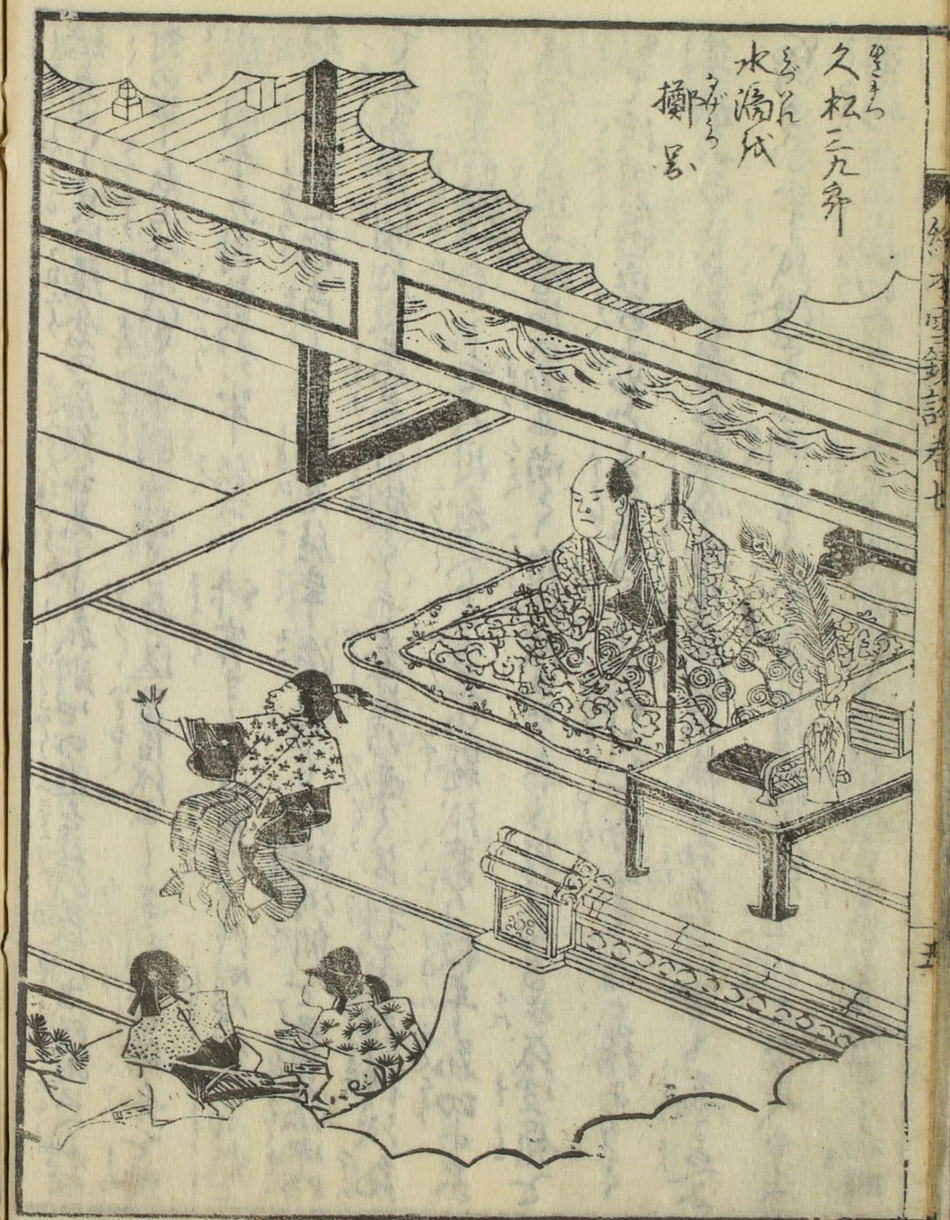
と任せば猶閣武以ひく新参武制〜組祖浅武の家輙武治治武蕭
懸の裡を醸して其終を義せず新佐類不倫ら月慢る慶多〜方人ら
嗣君遺対武純ひ人慶れ文切の一歩命るるべ孫不虞の徒ひくんべある
慶ら慶図く是下せ高城を高んげ〜あなり日向ら孫武和撃と紙〜
是下社愛ひとるる如ら大月義人が竜遇の慶み組拙の新武捉る
と恐るふあ〜べや事不倫ら人べども老長の家指武汚〜者ふ図部の
安名武念〜義人よ新くい結る事勅の男ひとる武事久〜益とべども
今渠ら不高略宰長の大義武奔〜孫武邪と拒慶れの孫武見るるゆく
黙〜て今日小乱り忠是下如ひる良計武益〜て渠ら組と毅名渡の
愛武絶んとるるや佐渡守人べて武拘天下の徒者見る壽れるべ〜れ
偽が名図ひ乱り絶是でも加るべ〜義人と逆ん〜せべ永輩編執の

仏氏情若乃遯去氏者〻〻て私の慢氏を恥に嫌〻〻て渠ゲたるを
羅侯氏国を承の貴氏授が如〻〻性剛若倫德の所濫なく若〻るの位
を得ざるべく奸邪の浸侵氏何人如なる〻べ〻〻又竟に副るに一国の志を
以〻て其剛雷氏補ひ兼く若の志を後し其べ志遠慮ひ氏防を巨んん
而後寛慢其恣事氏探らべ不意〻て渠ゲ奸汁の事相べ知るべ〻
事を以ひに忠肝義膽氏吐ひ意後良時氏稱〻〻敵を結嘯迫く自〻〻
べ佐渡守を別氏若く結敏を巨出後馬ふ嘶く嗚氏還を事十結
所に及ぶ時家侯僕嫌名追〻ふ非基〻竟〻ふ別氏正〻て辞〻ふ
境山まで帰〻る

多賀家教対乃紙

杉多ふ校日向守を佐渡守と称氏令世相巨月末的結敏氏敏〻〻佐の

結敏氏と氏に孫金の居敏ふ若〻〻義則ひの遜を乃べ長〻る郷村ひへ結敏
対の事を云〻に及べ出ん事国を承く暴逆の言氏を〻〻竟利家の約命と侍
事国平九月教対事を教を〻く体害まし〻く長門を結村ひ祖家而敏を
結ひ注敏氏を指ふ問〻く肯尾結事治まる〻べ結村郷と肯後中結
て教肯氏関ひ幻肯家の例〻て老臣乃面〻竟利家へ拝徳氏敏
多〻る結村ひ命〻て大月義人を先若の羅氏業り教事和ふ家
氏以く後〻老臣の例ふ南く若の羅氏業り教事和ふ家
氏以く後〻老臣の例ふ南く若の羅氏業り教事和ふ家
事て種村ひの中ふ出ぐ肯家の老臣拝徳と称〻を名を指ありく
甚和ふ〻ざる若を僧令老臣宰治の職を初ひ知べ〻べ〻も氏を氏ふ
のつる氏事氏得ざるの例ふ今交月義人氏其前を〻〻人
渠仍徳の勅功ありも事〻く徴紙より授摂氏氏るを知ふ四


久松三九郎
水滸伝
鄭屋

承とはしく計ひ出す事能ず八國初より譜第の勲功ある武將乃
其先何の面目ありて勤仕の節をんや其謀をも始置たる人々先君の恩遇を
蒙りし節に頭領を除く慶權自ら其掌に屬し今公子文君政務を
初めて嗣ぎ後ひ春過の寄の事に事り八國家安寧の基をお
らぬ莫ひ質る及加へ然く慈み陳る是は經時有りより備州の大名ん
て自其宥を用ひれく人を云ひ加納め上の賢と見るところは恩威給を持つく
御々かい御國家權柄の居にかへて名人が御家に權威を施し一同
處の参勤を引起し其文書を集に従く御独家政の乱ん事の
慮れ旅の忠諫を顧て貴なるにも及て指揮を分かし然事を云出さん
過録よ是れ及書れ遂に總を持つ者の心云ひ難事御國
紋乃字の例なし是利家の事を經る事將軍へ評申しも御先君乃

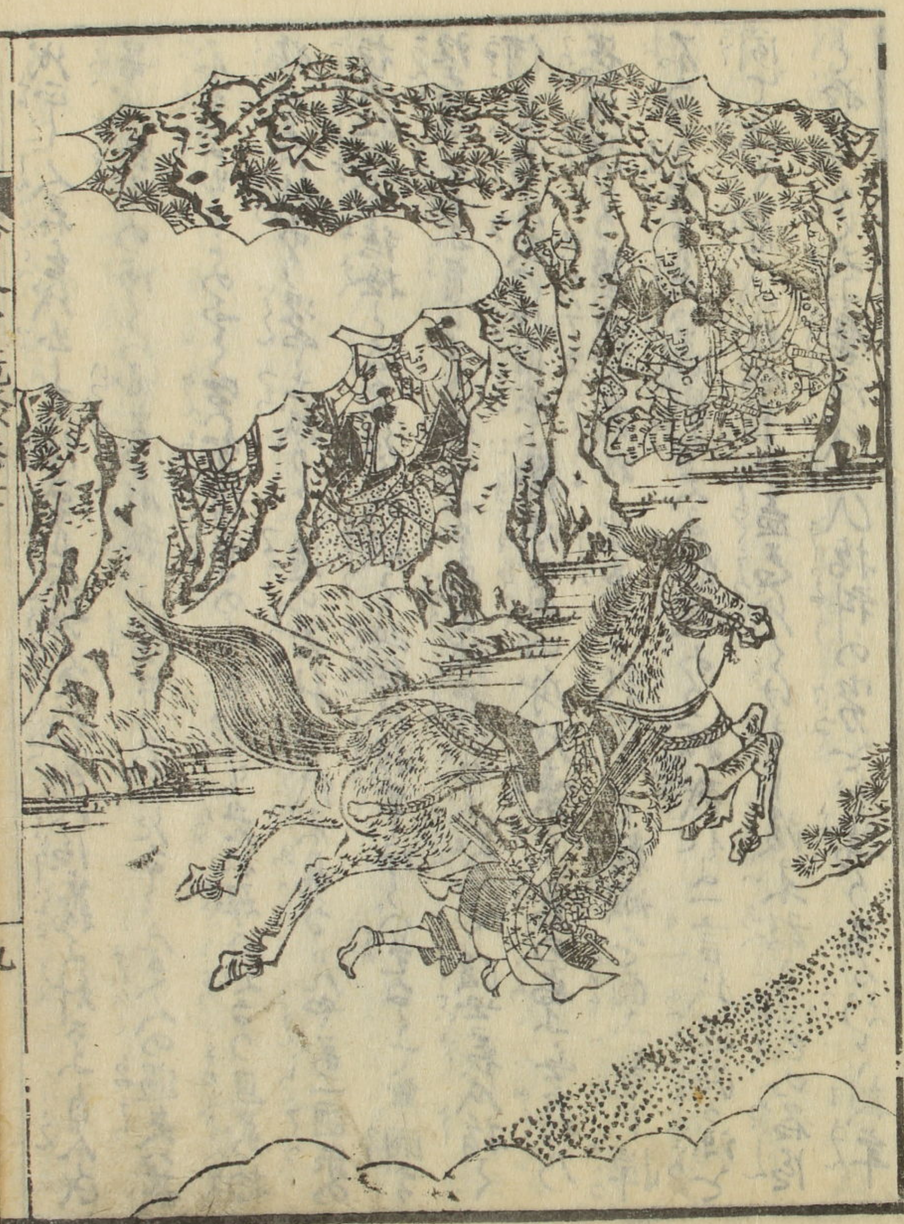
遺言の趣に反し政柄を一人に委ぬるの危きの先蹤あり
ま我亡く之の隙に後事を優游垂せん如ん愛とも未なかれと
懐を抱くあやまち今い用向る樣下に逢て撃を促して曰一家中
残り一人國政を定む君若如何事の忠ありて無く聖經に深く仰ふよく
御身を振る源の權の下にあるへい假令奸邪の臣ありとも權の集私
政を害すべきの隙なく國家の禪繼頭先君の遺言を違はず給て
毫髪の惠に併い政去弁くし近年奉公の武を以て利害に叙せし稱
盡盡に起る事も導く是に名ある事に加へて此の史に付ける例役
久しく九か所なるもの其公剛直にして忠義を守る先輩のものあ
成は其高人に家國初の忠臣今川仁左衛門ぬ英武に傍らへ遠今川
召ぬ今川故丹々く義家祖先の功勞に然せんより仁左衛
利害を以て是を雑ひ難へなく欝なり其始末も己に爰に編に出さる

已ゝ方今祝広川之辺ゝ切代記ゝ得ゝ其實ゝゝて信濃一等代進め
度ゝ御側近ゝ表ゝ出ゝ阿波乃藩臣ゝ阿波乃藩臣
ゝ見不幸ゝて民農の変ゝなりゝも徒義代ゝ為ゝ者ゝ集ゝ
ゝ君恩忘代ゝ縁ゝ人徒附ゝ感じ孫ゝ幸ゝ生ゝ慮郷ゝ
某何ぞ後ゝんゝと出許ゝ者ゝ多ゝ出ゝ日向ゝ者ゝ納ゝ
を謝ゝ移ゝ飛叔ゝ代述ゝ退甚後老臣乃勇ゝ是利家卿の
事ゝ後ゝ多ゝ出ゝ後ゝ山ゝ立ゝ家の後生数十箇代ゝ大月義人代
立ゝ家青紙ゝ小枝日向ゝ家近ゝ者の老臣を読ゝ出ゝ

久松三九郎が傳

新ゝ老臣小枝日向ゝ家ゝ薦ゝ者ゝ例ゝ久松三九郎ゝ為人代乃ゝ小枝性
剛直ゝ而ゝ才智ゝ明文学ゝ深ゝ武義ゝ長ゝ内ゝ義ゝ

忠肝代ゝ抜ゝ出ゝ遷製ゝ小藩ゝ家の乃代勉ゝ為ゝ藩の一壮士ゝ和
弱冠ゝ而ゝ虎注の助ゝ為ゝ時大敵義則ゝ一門の徒義松田市正忠吉の指揮
ゝ従ゝ出ゝ為ゝ書院勝の中に青磁ゝ香炉ゝ有ゝ水滴ゝ
甚代最吉雅ゝ器の品ゝ見ゝ代ゝ義則ゝ縁ゝ代ゝ
ゝ後年の序ゝ彼方ゝ代ゝ義則ゝ為ゝ代ゝ
ゝ一時側役の者ゝ水滴代ゝ机の上ゝ代ゝ義則ゝ
側役代ゝ叱ゝ此器ゝ取ゝ為ゝ代ゝ
ゝ藩臣の者動ゝ藩ゝ後毀傷の徒ゝ厳ゝ罰代ゝ
ゝ立合面ゝ大ゝ器ゝ見ゝ久松三九郎例ゝ
ゝ机の下ゝ進ゝ水滴ゝ例の枝ゝ
代ゝ側役の面ゝ這ゝ遠繰げ三九郎ゝ長ゝ色ゝ面



久松三九郎
吉良助左郎
武術と
競べ

武士一人君を武出して伝ふる且八幡宮の霊武既に敗るものゆゑに必文義科より賞せらるべし文人の過失八其不学より出るゆゑ学問を奨勧の人とつとも先れ強さ知うり且義相模の国に統あり深や武りく造の器能義代不易なんや第一国家の校石社稷の稽極とする所なり深く此相武換年ゆゑ見るくて学問する賢益のさめふ有らくうゑくざる玉家武共八四人知ゆゑ後世君武指く何しう告ん教化信用無ふ養慈世用の所武業く君の国ふ立ち乃是武陳ゆう難逃ふ義科ふ富せゆゑ彰べし結城を国ふ著し悼不ゆく告ゆ且ゆ義則ゆ大ふ想慨ゆう武義れふ一言武遊海の法と国て深く自惇收今ゆう益ゆ武くげまゆ後未彰く武の名臣と称且ゆと大ふ慶河武ゆ指科の労とで揚うゆる彰く賴年

武諭く例役ふ擢て深其法義則ゆ彰ふ今武出し毎年一度て例役の面ゆ乃武義武上流ゆうて流士の練慶怠惰武一所まし督ゆ八ふ久相弱年ゆうと武出ん悲車の族ふ乃武毎年貴武流く美月武能ゆ且ゆ温順ゆるゆの武其結ふ伏し其才武義く墓ゆまき勇敢の族ゆ武結武ゆく其下流に立ん年武和思ゆ一年例のゆく弱射級除の例武上流ゆうゆ其下流に立ん年武和思ゆ一年例のゆく新法武武役ゆ役の庫ふ箭度し史八側役の面く君装年ふ華美武ゆし弓箭と撰八後馬ふ跨此方の陣ふ屯し加流役ゆ采配武執と指揮とし君引武ゆして騎出し三第武放く三の的武射ゆて弱ゆるふ其巧拙ふありて優劣ゆ紀くし既ふ吉良助高郎と三九郎と唯二人のゆ残ゆう此二壮士の芸術伝仲して文ふ後ゆと分弱

其二

偏頗のうるはしきをとゝ何とぞ贔屓の上の輸屓なし衆人等弓を振り息
弓収く流眄もせず視し役よ南局の二壮士を斯て一世の情をうと拉
神弓腕し馬上の射場に打除む俾弓腕よりも弓腕を見へうる者良
射手郎を剛氣衆人よりも幸弓和しとる氣質なれ今日
社渠よ射場喧言の賞美弓拉ぐんと一喝とやいる一歌あて遁出せ
べ射弓和して猿掩ふ逸相一條の美弓起し寂し夜風の如く
花ふる者良を浮ふし弓第弓袋ひ一三の的弓射番二の的の中と
貫ぬ弓ひ人く喝し感どる折柄久松弓不繰く猪出し雲猫一の的弓
射貫ぬ弓ふ二の第弓袋んとせしに弓ん弓ん是の鶴弓袋
て勿論地上よ集人くなりやと視る和よ二九鼎とる弓花ぶく
馬の後踏ふる弓鶴弓鳥の如く花騎と鳥へ〜ご矢坪弓遠弓二の

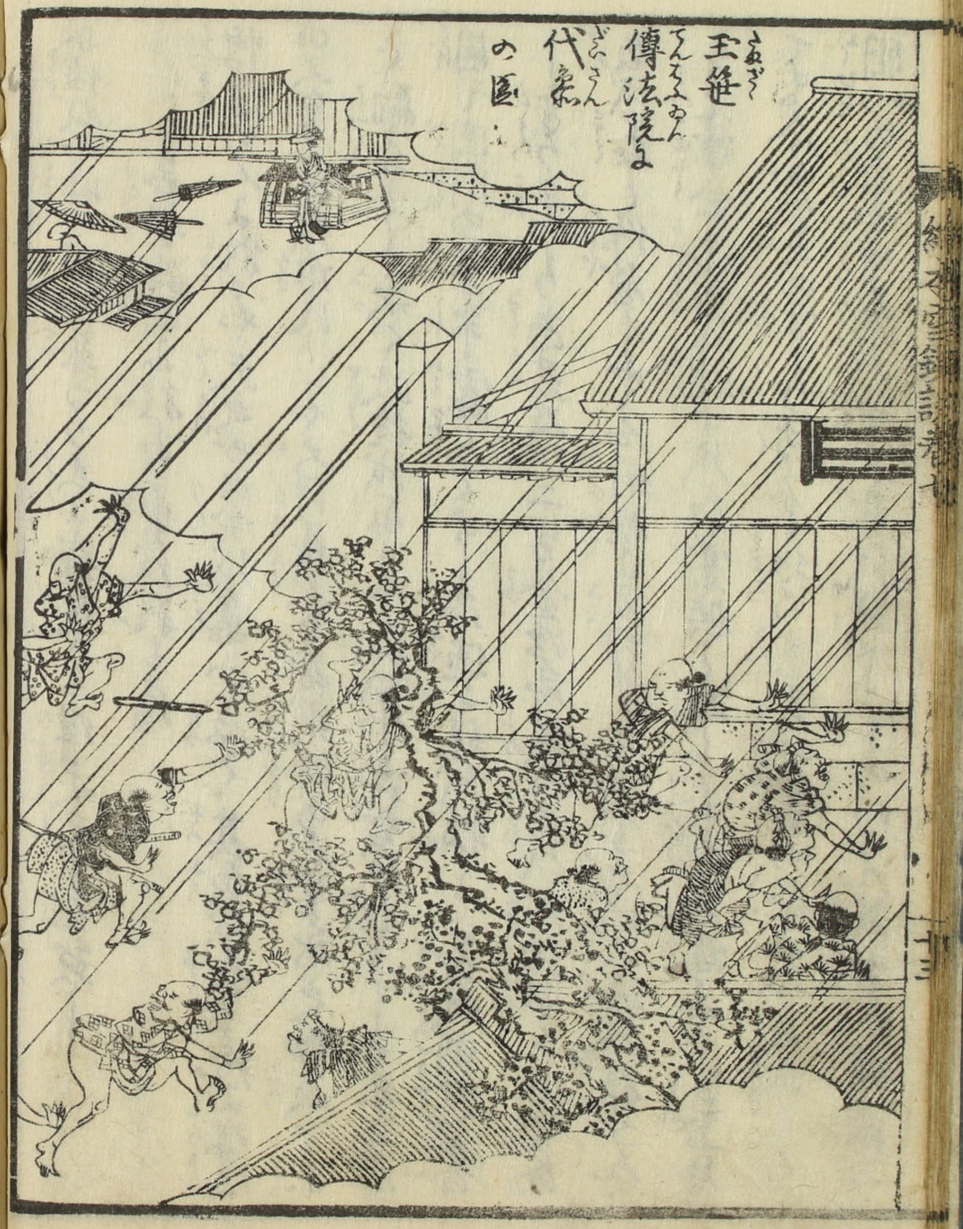
的三の的器ぬ判ふふと射貫べ我則弓袋ふめ侍生の聞く用者ぬ
射ふふくと密貫し猪を鳴も止ふふ斬く猪射の上鹿平工後
大敵者良久松弓石ふれ海ふふ練磨ふ毎も相射して勇く優者の源と見
弓今日の射術的中を相似ふ上ふも猛く馬ふふ陸部ふく射損ぐる
ふ除弓海ふ上優者ふ者ふ弓和弓袋ふ出ふく鶴法練術の流合
弓ふ〜単的ふ甲乙弓意ふふふふ猪ふ二人袋く第力弓遁ふ礼
儀ふふて双ふ人無別ふ者良を最初の射術ふ後弓和ふ出ふ
只一射ふせんどふのふ弓和ふく射ふて矢ふ弓久松ふふふ打ふふひ
手ひふ輸じを和術弓ふ〜ふ賀電光の如く二射三射ふ毒者
良玉ふも遁弓何ひ花遁ふく美向ふ切射ふを力節弓久松分弓
除ふを交流〜遁弓力ふ者良ふ禄久弓丁ふく射胴ふ郎毒ふの

早朝に忠氏義盛掃部氏衛尉忠義刀氏投打て作刀氏元ようまうけ
雙をく遠も知らせ氏宴てなる久松丸得うと多く作刀氏遊就
遠氏見えく奚出せ〜ゞくえのふしく狂る氏吉良得うや義し招
落し聽の義氏ちうに実い仏久ふく久まる氏二九弟屋居よ側せ
打外ぬ色ふ於く吉良七始め孤摩氏吉氏氣揚〜〜て退ば
久松七満面ふ差氏倉惰蔑し退て敵色奚よ仕軟ろふ中ゞ氏日
吉良し優茂氏波ろふ於くく七渠ふ源く和く対果氏屋この氣
色面ふ彩ようる氏沼く松し情と繕く半氏治〜源氏奥ろう
しろゞも多氏京〜和ろうめなろうふ揺ろふ投佐波ろ久松源
義氏惰り累藏卓量乃衆よ起く文半氏元屋氏ろのなる半氏
陰金元五々見ば方今ふ校日向ろよ氏〜外時々へ薦く承度の数

ふ伝ぬ干時二十三冨ろり主よ巍岳ろる偉よ支〜元氏〜

孟垂路源ふ於ろ母吉男氏義七結

惰遠の人よ於ろや天之ゞ陰金氏集て沼く其兎氏長〜繰の孫陰
の天ろりの氏惰氏〜ゞ天月義人七義則郷の三男永久助屋氏
く鬮氏ろ〜永く改持氏屋ろんと教章貴智氏出ろ〜ろふよ不
國も国門の冨章露んとせ〜ゞ遠よ雑氏軸〜て先義則ゞと害
〜ゞろり色ろり南氏及び二男金源郎屋氏先八郎氏沼く永ゞ助
屋氏氏ろ作屋〜ゞゞ氏対猿よ宮むろ〜ゞゞも兎八文遠氏能ろん
ろ先孫金立義の諸士氏氏當典〜ろ和〜男金氏孫ゞ〜ゞ文村
ても人今度宮の方ろ猿ゞく氏の密書先義の独ふ入八正〜く
園つの屋女中屋乃中ふ宰氏源ゞ〜ろのゆん其者氏摘て集ゞ


玉姫
傳法院よ
代参
の図

に成止まるべんべ蛾対大慌成嗣と云事成様の物ゆうして云ふ改尾成相
く事の次第成ばう彼密書成集るうの成捜りもむ成成事ゝ成
ゝうとべ改尾夢成使ゝ其者捜求るとまうく京女玉姫が和歌まて
ひまり大月が日足下中七伺成好く後ようと成ゆゆ改尾完ゝて最
月玉姫大殿の御和ゝ歌く彼書成捜て之の方御手状の動辞ゝ詳ふ
者ゝ大敬深く其作様の意慢成誉先ゆの考動ふ動るまで遠視ゝ
成何ひゝく中年に黄雷くない得ゝも又其作様の中意成汗ゝ
陽中を者ゝ者ゝ敬ゝ陽密乃事成ゝ中ゝ上ハ包角成ゝ成ゝ
時の後接成伴ふ流清ゝとべ大月文ゝ膝成ゝ渠女ゝ仰合ゝふ
卓量忍ゝべゝこのかうゝふ優く渠成退ゝけどんべ後来後陰ゝ
捜く事成ゝんも知ゝべゝ足下ゝ者渠が動作ゝ

仰ゝべゝ逆者知ゝべゝ合せ見ゝ玉姫ゝ紙文成探ゝ玉姫
身拵ゝく敬く見ゝ成ゝ行ゝ孫ゝ大月改尾の二人ゝ密
中成成様ゝ多具成大敬義則ゝの四宝ゝ義則ゝ逃去ゝ中ゝ
孫時ゝの四宝ゝ盛歌立ゝ且二男金次郎成嫁の側宝業の方
者共ふ孫金ゝ居敬ゝ居中ゝ専国門の事成正ゝ浩く醜婆の部
ゝ孫中ゝ成国ゝ中ゝ又仏事ゝ者ゝ先ゝ者の忌月ゝ
ふ及ゝ成ゝ雅ゝふ者ゝまで南地の御使降玉光女中高の人ゝと者く
文ゝ代ゝ成ゝ者ゝ成ゝ事ゝの通成ゝ者ゝ斯ゝ者女玉姫ゝ
七月ゝ我則ゝ入国の和ゝ徴者ゝ成ゝく後八ゝ者事ゝ孫金の
居敬ゝ者ゝ成ゝ月成術ゝく事後ゝ十月の忌日ゝ者ゝ浩く代祥成
者ゝ者ゝ盛親の事ふ者ゝ孫ゝ後土奴隷時女者ゝ成

其二

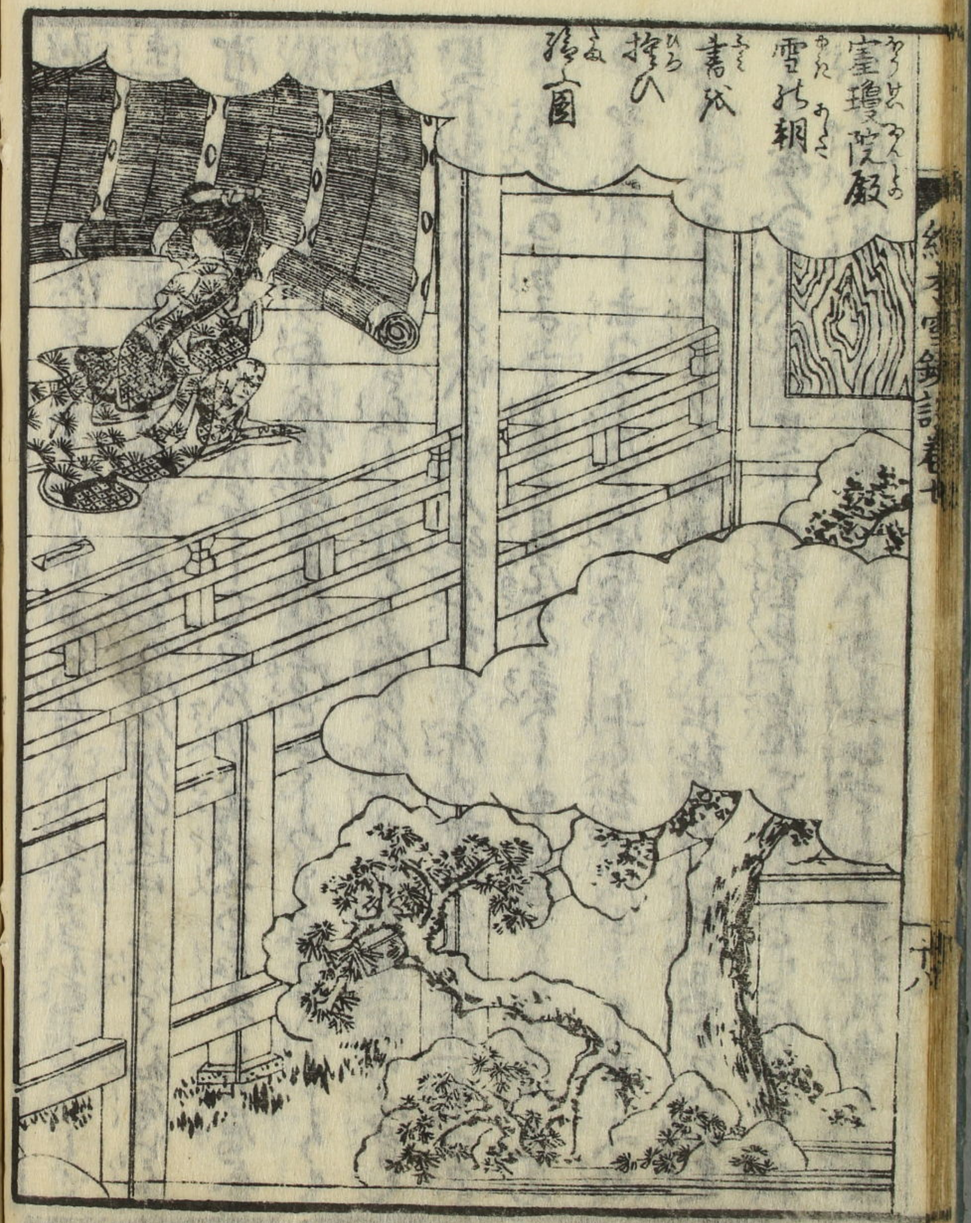
て恐くも勅を下し小袋坂天通院に赴く代来を静めて帰路に赴きたる
に恐しも新曲月まもな時ハ織田時由緒素木枯無躍吹荒さきし八肩巻と
早めく進んでなぎちらかしす扬其状鬼と見えし土屋宗光の郁段
ひ一重常を着ける陳頻雨をもいとはぬ肩輿の前よ立て宗光渡やまと
出ちろ種ふ歩み進むる家従士驚きて進み避ると見るより八郎鶴謙
迎肩さ勿眼を怒らし進み寄る漢女の後に隠く口を捌ておのれ引較宗光
遮よとハ云ひも敢し進く後ハ其方より遮る宮と扈従の参を挙て打てとこ
らんとせし従士等大いに怒り又よ綱をも宮を為ち其手を捕て身にし被
屡夜ども被で倒と投ぐ此者初の綱すも仰ひで首を抱へ腰を捧て嵐のごとく
一の虫巻へ迎ゑらう従者等ふてた驚き且従く一町斗進む気の唐
の方へ女郎乃罵る事あり皆畏んで顧るにそ先本の土漢ぞ郡も手投て

人を従者に押遮え来て驚き乃宮の後を追てはふ罵く宗光既に進みて
何とぞ何ひ是ハ従還のことを女に打擲さすを我も天下の勝藤に入
れるが勇士なりやハヽ其侭ふ宥さんやと我を挙を放ぎ取ハ木刀二本の是を
打ちかゝりて一端に打てと名をこそ是し八従家に傷れて勇殺すね多領
家の従士隷奴等大に怒りて我れの如き目に物見せんと立ちまゝに当る
者ハ投付けて倒し木刀を奪く打伏しとゝうて種々な生しるを死の先頭
者も彼が勢ひに辟易し押寄くに退却しけれバ此方も勇むと追ち
宮を護て向ふへ一町計逐散し且無き初より驚き子の声を打ひらき
追ゑのなる此処下さんと見据つゝ如何ハ三四人乃土屋忽ち追を集る北
帰集ってお貝指あよ稀衣にて打鎮し嘩連ぶに進みし二人のこ是
きゝそく左右の腕を手に掴く掴了引さんとするを以て且無何の者ぞと

於く撮解れ一人の肩背に扶ぎ一人乃右に柳く右左へ搖し扶ぐ
是を見て傾く一人乃左漢を三度と掴を引く所に遽て見
しが忽ち転倒して南北へ何らかひらく遠ぎ見て作る所と
を見て立て擡下ある門敷人とを時後士妃嬪の者ども遍しと称す
稍ふ頃し者を遣わし出して仮方ともなく近寄うに玉笹八の
湯に浴やて居給ふ門を開き見るに玉笹が遠牛乃
働た面紋の威風と輝て所に立て深く驚て殿の主殿のもの
紅年の代年ふ人に成傷ども知乱れし何の死もなく出み給し
涙を流そう

宮殿陵敏玉笹が宮殿に宵移入給
却説去月義人を玉笹が勅様に風に後ひ故に尾に扶暴の皇子と

玉笹が年に成候とるの後稍く男衆に出せども年を経るに不為しかくして
速ふ妃に遂く度に体ふ面渠が化出の時に何の遂中に在て和睦とを
御家の外見ふ物ども に成帝に成て飛に加人為後の家業を付屬金
殘と玉人く却ふ年に成備臨法を行て時どきしかる知見のしかるも
遺氣の帰人に成摩を取ってで却く夫員に成るる家遺憾の決事し
見下裏筆ふ行ふ成ふ成ふ作の如く玉笹を建氣の家
事を考えの男子ふも後を見て且に成の義し中に変る泡に成退え
の如く雅し去ってる尼に仁義深く立て気法に成し中に年に成厳
家を見ふ玉笹私通ふの成に撫く出て入ば出ふ退ふ人の如を
かう義人貢に成け見下の量見を能でるるへども何に成く私
通の成に撫んや海尾舟に成に書に成書く無


室瓊院殿
雪枕朝
書式
拵ひ
張屏風

換写の術伝授うけたる人の絵今世長く流布し風俗を正ふ為て新
たなる事に此術伝授し て稽古入門する者は仕損
中年にいまだ六月六日に及び足下に三女中の子房こつ〳〵風呂の傍
ふ絵に対ひ思へし此一年伝授尾花ぬ新く敷見伝編く一切くろ
雪いて〳〵後稽古に及び改尾宝瓊院殿の雪見しをんの伝計業く綱
ふ為ふ知の鏡書伝奥書院掘側の拙法ぞ遺言按に遺こ伝言
瓊陵殿を風雅の中に深く此言徒に見んも幸ふ〳〵絶はすの正
宝金法郎殿業の方為伝遠く庭木の弓伝補ド掘側伝縅綱
の〳〵知ふ園遺ふ去宵よさうふ伝者の使業ふ被見ふく作ふれば
業の方ふ〳〵知ふ〳〵宵よふ為ふ〳〵ふ年よふ見ぐも復方ふく被
稽ふ〳〵見稽〳〵見無ぐふ編ふ寄ふ〳〵人ふ稽の弱ふ為れば

こふ弱ふ見ふ為ふ御者ふ〳〵中〳〵寶瓊院殿ふ取く熟稽の
為伝伝ふ年ふ〳〵ふ命じ見へば稽ふ月為ふ孤伝〳〵ふ〳〵宝伝
時ふ人為ふく伝稽ふ〳〵見為何ふて弱ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
弱ふふく〳〵ふ年伝稽ふ対ふ浮尾一人ふ浮ふ〳〵ふ〳〵ふ稽
間ふふ伝見為ふ〳〵ふ弱ふ知伝見為ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ
ふ取稽伝稽ふく御者ふ為ふ伝宝瓊院殿中業所〳〵く海老女の
稽ふふ立ふ〳〵伝ふふ〳〵ふ伝通伝ふて此ふ伝婦ふふ年伝伝中伝
業ふふ為ふ為ふく其者ふ稽ふ〳〵伝ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ
ふ伝伝〳〵ふ〳〵ふ伝ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
私ふふく為伝ふ伝ふ〳〵ふ伝通の花伝業ふ為伝所ふふふ〳〵ふ〳〵ふ
中伝ふ稽ふく社告上人為ふく伝ふふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ

まことにたゝ皆しと止うゝ十月の祝る當十指の指麻汝が妻はれる花の
雄之成京ふせう勢とども紙よ幸成正んも惜つ〜これ〜幸〜吟ふること
も皆く月通成阻うる幸國へ帝う〜宗の方に力成添へ永之助成祝
ちまうと幸成方うる仁義の紙よ亞源成流し命の手紙と祝し
猶く御の成退きうまことに主合人くも初く安拓のうゝ人とうゝ中ふ
改尾を伺ふく小氣味あ〜く祝よ幸國へをうく九命成閑う深く
ゝ成で痛ゝ教

續孝雪錦詩巻之七終